

世界遺産の礎を築いた高島商人

「小野権右衛門勝礼と橋野鉄鉦山・高炉跡」

近代製鉄の工程を現代に伝える
「明治日本の産業革命遺産」

今年7月に開かれたユネスコ世界遺産委員会において、「明治日本の産業革命遺産」が世界文化遺産に登録されました。

長崎県の端島（通称軍艦島）や三菱長崎造船所、八幡製鐵所などとともに、石手県の「橋野鉄鉦山・高炉跡」もその構成要素の1つとして選定されています。

橋野鉄鉦山の経営者は大満出身の高島商人小野権右衛門勝礼であり、安政4年（1858年）、盛岡藩の大島高任の指導によって築かれた橋野高炉（現存する日本最古の洋式高炉跡）と併せ、採掘から製鉄に至る近代製鉄の工程が把握できる遺産として評価されています。

すぐれた商才と先見
日本の近代化の礎を築いた高島商人

その小野権右衛門勝礼は、高島の「小野組」を起源としています。初代小野総本家・小野新四郎則秀は大満十四軒町に居をかまえて商業を営みました。

当初は「靴屋」という屋号を名乗っていましたが、のちに「大満井筒屋」と称するようになります。則秀の二男にあたる村井権兵衛主元は寛文2年（1662年）に盛岡に進出し、「近江屋」を営む村井新七の養子となって商業に励み、10年後には造酒業と質業を扱う「志和近江屋」を創始し、大成功をおさめました。

小野善五郎（総本家2代目）の二男にあたる村井権兵衛唯貞（初代小野権右衛門）は、叔父の主元のもとに身を寄せて商道を学び、主元の養子になって志和近江

屋を継いだ後、「郡山井筒屋」（造酒業）を立ち上げ、のちには「京都鍵屋」（質業）を開業しました。

小野権右衛門家の7代目である勝礼は、明治元年（1868年）、橋野鉄鉦山に伴う銭座（貨幣の鑄造所）を開設しました。当時は3基の高炉が稼働し、人員約1,000人・牛150頭・馬50頭の資本をもち、年間約30万貫（1125トン）もの製鉄量を誇るなど、国内最大規模のものでした。

高島を出身地とし、すぐれた商才と行動力、先見の明をもって盛岡をはじめとする各地に進出し、ネットワークを駆使して全国展開の商売をおこなった彼ら「高島商人」は、日本の近代化の礎を築いた、私たちの偉大な先人でもあります。

参考文献：駒井正一著「高島商人―隠れたる近江商人の謎―」（昭和62年発行）、「近江商人の鉦山経営―知られざる鉦山経営の謎―」（平成19年発行）

写真：小野組総本家屋敷
小野組総本家屋敷が存在していた頃の様子。老朽化のため建物自体は現存せず、今は跡地（大満十四軒町）に案内板が立っています。



閩文化財課 図(32) 4467

編集後記

ある早朝、百舌鳥のさえずりを聞きました。朝夕めっきりと肌寒くなって、深まっていく秋の気配を感じます。田んぼにはコンパインが走り、マキノピクランドでは栗園がオープンしました。各地から実の便りが届けられ、私たちの食欲を満たしてくれる「おいしい」季節の到来です。私は、秋と言えば「秋刀魚」。近年、漁獲量が減少し、少々心配しますが、脂の乗った「焼秋刀魚」とビールは、私に至福の時を与えてくれます。海の中でも、これからが食欲の秋。冬に備えて魚たちが食欲を競います。釣り好きには堪らない季節でもあります。大海原の中で、ひねもす釣糸を垂れて秋を堪能したいなあ。(Y)

広報たかしま

平成27年

10

月号
No.189

発行：高島市
滋賀県高島市新旭町北畑666番地

編集：政策部秘書広報課

〒0740(25) 800044
http://www.city.takashima.lg.jp
t-info@city.takashima.lg.jp



戦時下に発行された
擬似紙幣

戦後70年が過ぎて第二次世界大戦時の記憶も遠くなり、その時代の語り部も少なくなっています。こうしたなか、東近江市平林町所在の「陸軍平林射撃演習場跡」が新たに戦争遺跡として周知されています。このような傾向は近年増加し、戦争と平和を考える時の貴重な教材として、その存在価値を高めています。

今回、朽木資料館で開催する「記憶の中の軍票」展の軍票について、あまり耳慣れない言葉ですが、現在80歳以上の方は聞かれた記憶があるかもしれません。軍票とは総称で、軍用手票しゅうひょうとして使用された擬似紙幣のことです。日本では、明治10年（1877年）6月西南戦争に際し、西郷軍（西郷隆盛）が使用した「西郷札」が軍票の初めとされています。日清戦争以降は、日本軍が占領地における軍事行動の際に必要な資材や労働力の代償として、各種の軍票を発行しました。昭和16年（1941年）12月10日のマレー沖海戦を境に、アジアおよび太平洋全域に戦火が

記憶の中の軍票

拡大、合わせて軍票も数多く発行されていくことになりました。

軍票を通して知る
戦時下の苦しい状況

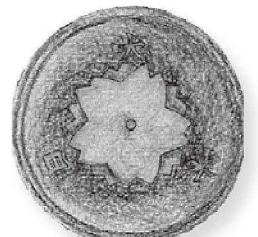
最近では防空壕や地下坑道などの戦争遺跡が、平和教育の資料として大きくクローズアップされています。そこで、当時の社会経済にあつて軍票が造幣されたことを知り、遺跡以外の戦争遺物を実際に見ていただくことで、戦時下における苦しい経済の一端を知る一助になればと、「記憶の中の軍票」展を企画しました。展示品には紙幣の他に、大変珍しい一銭陶貨もあります。この貨幣は京都で焼かれた陶貨です。有名なものは有田・瀬戸焼製で、他に各地の陶器メーカーが造幣しました。戦時下における物資不足の一端を垣間見ることができます。



軍票



富士山
(オモテ)



桜花
(ウラ)

一銭陶貨イラスト

○朽木資料館企画展

「記憶の中の軍票」

【開催期間】

3月3日（木）～31日（木）

【休館日】

月・火曜日・3月20日（日）

【開館時間】

9時～16時30分

編集
雑感

1年が過ぎる間隔は子どもの頃の方が長かったように思います。年度末である3月は季節の変わり目でもあります。いろんなことを変えていく時期です。学生の方は一つ上の学年へ上がり、後輩ができたり、学校が変わったり。今回の特集では、今年3月で閉校となる安曇川町広瀬小学校を取り上げました。古くから伝わる歴史や文化、それらを受け継ぎ形作ってきた、子どもたちの姿と想いを掲載しています。(M)

図文化財課 ④(32) 4467

広報たかしま

平成28年

3

月号
No.194

発行▼高島市 編集▼政策部秘書広報課
〒590-0135 滋賀県高島市新旭町北畑565番地

☎0740(25)8000(代)
http://www.city.takashima.lg.jp
mailto:info@city.takashima.lg.jp



ある夏休みの出来事

これまで歌い継がれてきた「琵琶湖周航の歌」は、大正6年（1917年）に、小口太郎が今津の宿で披露したのが始まりといわれています。小口太郎は、大正5年に現在の京都大学理学部に入部し、水上部（ボート部）と弁論部に入部しました。小口太郎をメンバーに加えた水上部の琵琶湖周航（船で琵琶湖を巡ること）は、大正6年と7年のいずれも夏休みの6月に行われていました。周航

今津中沼でボートを漕ぐ今津中学校（現高島高校）生
：昭和5年



歌い継がれて100年 「琵琶湖周航の歌」

は、3泊4日にわたり、1日目に大津を出発して雄松（近江舞子）で宿泊、2日目は雄松から北上して今津に宿泊、3日目は竹生島に上陸した後、長浜へ立ち寄り彦根に宿泊。4日目は、長命寺（近江八幡市）に寄って大津へ帰港するものでした。

誕生「琵琶湖周航の歌」

当時のメンバーの証言などによると、小口太郎はこの周航の際に、琵琶湖周航を題材にした詩をつくり、2日目晩の宿泊地である今津の旅館で、友人たちに披露。彼ら学生の間で流行っていた吉田千秋作曲「ひつじぐさ」のメロディに合わせ、皆で唱和したことが琵琶湖周航の歌の誕生の契機になったと伝えられています。このことから、小口太郎の作詞に、吉田千秋の作曲「ひつじぐさ」（大正4年：雑誌「音楽界」発表）を合わせた

ものが「琵琶湖周航の歌」とされ、「ひつじぐさ」は周航の歌の原曲とされています。

なお、小口太郎が友人に宛てたはがきには、「今夜はこの今津に宿る」と記載され、その消印が大正6年（1917年）6月28日であることから、この日が琵琶湖周航の歌の開示（誕生）とされています。

歌われ続けて99年

多感な青春と周航のロマンを情緒豊かに歌い上げるこの歌は、多くの歌手や演奏家などにより広く親しまれるとともに、今津では、生誕の地として合唱コンクールが行われるなど、大切に歌い継がれてきました。

大正6年（1917年）に生まれた「琵琶湖周航の歌」は、来年2017年に100周年を迎えます。市民や県民の財産でもある「琵琶湖周航の歌」

琵琶湖周航の歌」100周年を契機に、これまで以上に次世代に歌い継ぐことのできる地域づくりや全国への発信による観光誘客を図る「100周年記念事業」の準備が現在進められています。

琵琶湖周航の歌」100周年を契機に、これまで以上に次世代に歌い継ぐことのできる地域づくりや全国への発信による観光誘客を図る「100周年記念事業」の準備が現在進められています。

間観光振興課

☎（25）8040

編集雑感

今月号で200号を無事迎えることができました。皆さんありがとうございます。私が広報担当となったのは平成21年度からで、かれこれ8年目になりました。今までで一番印象深いのは、平成25年に台風18号災害特集号を作ったことです。多くの方に被害や支援の状況を知っていただくことが復興支援につながるのと思い、現場の撮影や原稿作成等に懸命に取り組みました。発行後、市民の皆さんから多くの問い合わせがあり、広報の重要性を認識した一冊となりました。（S）



フィックス艇による周航



メタセコイア並木の誕生

秋のメタセコイア並木

秋も深まり、肌寒い季節が近づくと、近年多くの人が訪れるマキノ町のメタセコイア並木も、夏の青々とした姿から、紅葉へと衣替えを始めます。11月上旬から12月上旬と、長い時間をかけてその衣装は鮮やかな黄色から味わい深い朱色に移り変わります。今では高島市の観光スポットとして、多くの人にお越しいただいている並木



植栽当時のようす

道ですが、この美しい並木道が生まれたのは、今から36年前の昭和56年のことです。

並木道誕生秘話

昭和50年代初めに琵琶湖周辺を直撃した大型台風により、当時のマキノ栗園（現在のマキノピックランド）では、多くの栗の木が被害を受けました。それに加え、栗の木の立ち枯れ病が併発したこともあり、約4万本あった栗の木のうち7割程度が倒木したといわれています。また、台風は同時に防風用に植えられていたポプラ並木もほぼ全倒させてしまい、栗園は甚大な被害を受けました。

そうした中、農業法人マキノ町果樹生産組合が、栗園の復興と併せて道路沿いに防風の役目を担うことのできる並木をつくる取り組みを進めました。並木に使用される樹木には、強い風に耐えうるとともに、美しい景観を兼ね備えている必要があるとされ、専門家による検討を重ねた結果、成長の早いメタセコイアの木が選ばれました。



周辺地図

た。当時のマキノ町役場がこれを支援し、現在のメタセコイア並木の形成に繋がる整備が始まりました。

また、その当時、マキノ町では各種の観光関連施設整備を行っており、その事業の一環として「土に学び里整備事業」を展開していました。マキノ栗園は、その中核的なゾーンとして交流施設や環境整備が行われることとなり、約400本のメタセコイアの苗木が植栽されました。また、数年後にはマキノ高原へ続く県道沿いにさらに約100本が、歩道整備と併せて植えられました。

現在のメタセコイア並木

そのような経緯を経て、現在メタセコイア並木は、マキノピックランドからマキノ高原までの約2.4kmにわたって、春夏秋冬さまざまな表情を見せる美しい並木道として人気の観光スポットになっています。平成6年には新・日本街路樹百景、平成22年には日本紅葉の名所百選に選ばれました。この年設立された、市民参加の「マキノのメタセコイア並木を守り育てる会」により、保全管理活動が行われ、現在に至るまで美しい景観が保たれています。

図観光振興課

☎(25) 8040

編集 雑感

9月1日は防災の日(P6参照)です。最近全国各地で台風や大雨による災害が多発し、8月7日には高島市でも台風接近により「避難準備・高齢者等避難開始情報」を発令しました。私も一晩市役所で過ごしましたが、市内の状況は大事に至らずほっとしました。災害には予測できないものもありますが、日頃から避難時の持ち物や避難先を確認するなど「予防」は事前に行うことができます。我が家でも「防災の日」までにいろいろと確認をしておこうと思いました。(H)



広報たかしま

平成29年

9

月号
No.212

発行▼高島市
TEL 0740-1-0301
滋賀県高島市新旭町北畑655番地

編集▼政策部企画広報課

☎0740(25) 8000(内)
http://www.city.takashima.lg.jp
mailto:info@city.takashima.lg.jp

県の文化財に指定された

波爾布神社

饗庭の波爾布神社

新旭町饗庭にある波爾布神社は、社伝によると奈良時代に創立されたとされています。現在の本殿は、棟札（建物の建築・修繕の記録を記したもの）から元和10年（1624年）の建立で、その後幾度かの修繕・改修によって現在



の姿となったようです。

波爾布神社の特徴

その構造は、三間社流造、切妻造平入り、向拝一間、銅板葺となっています。

三間社とは、正面から見て柱が四本あり柱と柱の間が三つあるという構造です。流造は屋根の構造のことで、二方向に勾配がつく屋根（切妻造）の正面側が裏側より長い造りのことです。そのため本殿の屋根を左横から見ると「へ」の字型に見えます。三間社流造は一般的な構造で、全国各地で見ることが出来ます。平入りとは、屋根の一番上の棟（水平部分）に対して平行に入口が設けられる造りのことです。

次に向拝とは本殿正面の屋根の一部が張り出した部分（庇）のことで、一間（約1.8m）ほどの広さがあります。この下は参拝者が礼拝を行う場所です。銅板葺は屋根を銅板で覆っていることを指します。棟札の記

録から、建立当初の屋根は檜皮葺でしたが、昭和32年の修繕で銅板葺に変わったことが分かっています。

また、本殿各所に施された絵彫刻には中世から江戸時代の技法が使われているなど、当時の風格を今に伝えています。

この他の特徴として、本殿床下への入り口を設け、身舎の柱を一本抜いて空間を作り利用していたとかがえることです。床上・床下ともに内部は煤により黒く変色しており、床下で僧侶が護摩を焚き読経したと伝えられていることから、近世の神仏習合の形態を示していると考えられています。

県指定文化財へ

意匠的にも貴重であり、また床下での祭祀の痕跡は県内の他の地域では見られないことから、平成29年11月24日に滋賀県指定文化財として指定されました。



問文化財課 ☎(32) 4467

編集 雑感

今月号は成人式について特集しています。自分の成人式は、ほとんど記憶に残っていませんが、取材という形で人生2回目の成人式に参加させていただきました。

新成人たちの晴れ着姿は、とても華やかで活力にあふれていました。今年は、実行委員会によるアトラクションが催され、7組の新成人が舞台から「想い」を語ってくれました。その発表する姿は堂々たるもので、とても二十歳とは思えない頼もしさがありました。彼らと仕事ができる日を心待ちにしています。(Y)



広報たかしま

平成30年

2

月号
No.217

発行▼高島市 編集▼政策部企画広報課
〒501-1026 滋賀県高島市新旭町北畑6の5番地

☎0740(25) 8000(代)
http://www.city.takashima.lg.jp
mailto:info@city.takashima.lg.jp

ようさん 養蚕と製糸工場

養蚕業の拡大

昆虫である蚕（かいこ）を桑の葉によって飼育し、生糸の原料となる繭（まゆ）を得る養蚕は、明治時代頃から市内の農家で盛んに行なわれるようになりました。

日本での養蚕の歴史は古く、4〜5世紀に大陸からやってきた渡来人（とらいじん）によって養蚕と絹織（きぬおり）の技術が伝えられたと考えられています。ただ、国内での養蚕・製糸技術の水準はそれほど高いものではなく、生産量も少なく、

京の西陣などで作られる高級織物の原料には、中国産の白糸（しろいと）が用いられることが多かったといえます。

そのような中、江戸時代後期になると、諸藩が財政難に対応するために養蚕を奨励し始めたこと、さらに幕末の開港による生糸輸出が始まったことなどにより、養蚕業は急速に拡大を見せるようになりました。

高島市内での養蚕業

『高島郡誌』によると、市内では明治時代中頃から、桑園（そうえん）の改良発運と共に高島郡農会による生糸生産の推奨が進み、また、各町村に技術員をおいて、蚕の飼育指導等にあたったことから、次第に多くの農家が養蚕に関わっていくようになりまし。当時、特に養蚕が盛んだったのは西庄村・百瀬村（マキノ町）、川上村（今津町）、本庄村（安曇川町）で、これらの地域では、当初は家ごとの個人産業として生糸の生産が行なわれて

いました。その後、製造場組織として、個人の出資による製糸工場がマキノ町海津と勝野の2箇所に設立されました。

海津製糸工場の盛衰

このうちマキノ町海津に造られた製糸工場は、明治23年に海津の磯野源治郎が、海津字西内（にじうち）の現在のマキノ東小学校敷地を買収して、新設したものです。50台の金を備えて、同年8月に開業しました。原料の繭は、主に地元高島産のものが使われましたが、一部は坂田郡や伊香郡からも購入していました。また、従業員は、若狭出身の女性が多く、地元出身者や湖東出身者を加えると、最盛期には53人にのぼったといえます。

海津製糸場で生産された糸は、ほとんどが海外へ向けて船便で輸出され、一部は仲買人によって、長浜方面へ売却されていました。しかし、明治40年以降、国内での生糸の価格は下降の一途をたどり、大正元年、経営困難のため海

津製糸工場は廃止されるに至りました。



図文化財課 (32) 4467



蚕に繭をつくらせる簇（まぶし）

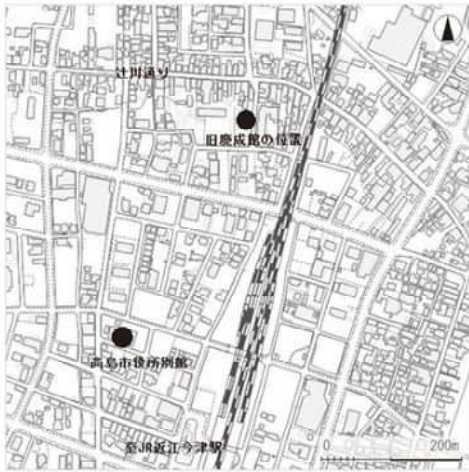
編集 雑感

今年の市内の花火はどこから観ましたか？ 8月上旬に今津・マキノ・高島の3か所の会場で花火が打ち上げられました！ 昨年は、会場内での撮影でしたが、今年は遠方からの撮影にチャレンジしました。近くで撮るのは大変な難しさがあり、とても苦戦しました。しかし、自分の好みは、近くで見上げて花火の迫力を肌で感じながらの撮影だと気づくことができました。来年は近くで、これまでに見たことのないような花火を撮影してみたいと思います！（Y）

慶成館の成り立ち

2つの慶成館

JR近江今津駅西方に位置する高島市役所別館庁舎は、昭和48年2月、湖西地域広域市町村圏事務組合と滋賀県共済農業協同組合連合会の共同建築によって竣工したもので、建物には「慶成館」という名前が付けられています。この名称は、前身の郡民会館の名前を受け継いだもので、建設当初は、2階に結婚式場、3階に集会や式典ができるホールがあり、多くの郡民が出入りをする親しみのある施設であったことが想像できます。前身の「慶成館」は、明治19



年（1886年）に当時の高島郡長・山邨 総俊の勧誘により、今津町今津の辻川通り近く、現在の今津東保育園の西隣に建設されました。県下でも珍しい、郡民の公民館的性格を帯びた施設で、建設資金は、郡内の有志が拠出したことが分かっています。明治22年（1889年）に出版された『近江国農商工便覧』には、「高島郡会議所」として「慶成館」がイラストで紹介され、そこには石積み

た瓦葺き2階建ての建物と、敷地内に立つ洋風の街灯、そして多くの男女が建物に出入りしているようすが描かれています。

明治期の慶成館のようす

また、明治38年（1905年）1月9日付けの「朝日新聞」滋賀版には、その前年に始まった日露戦争に関する記事として、1月5日に「慶成館」で、ロシア側の要地である旅順が陥落したことを祝う盛大な祝賀会が開催されたこと



が掲載されています。さらに、1月15日には、「慶成館」で戦死者遺族慰籍会が開かれたという記事もあります。このように「慶成館」は、郡をあげて行う大きな行事や、公的な会合などの会場として、頻繁に使用されていたようです。

なお、「慶成館」の名称は、設立当時の滋賀県知事・中井弘の命名によるもので、こうした事が、名前を引き継ぐ理由になったようです。

図文化財課 ☎ (32) 4467

編集感

今年の冬はとても過ごしやすいですね。これも地球温暖化の影響なのか、正月寒波や節分寒波も、寒いものの雪はあまり降らず、わたしは、この時期恒例の除雪疲れもなく、元気に冬を過ごしています。しかし、わたしも含め、メタセコイア並木の冬景色を写真に収めようと降雪を心待ちにしている方も多いと思いますが、自然相手では、なかなか思うようにいかないものですね。

春の足音も、ちらほら聞こえてきますが、平成最後の「たかしまの冬」を満喫したいと思います！（Y）



広報たかしま

平成31年

3

月号
No.230

発行▼高島市 編集▼政策部企画広報課
〒520-1592 滋賀県高島市新旭町北畑5の5番地

☎ 0740(25) 80004
http://www.city.takashima.lg.jp
✉ t-info@city.takashima.lg.jp

新元号の発表

新しい時代の幕開け

5月1日（水）から、いよいよ新元号「令和」の時代が始まります。今回の新元号は、改元の1か月前に公式に発表されましたが、こうした事前の発表は、歴史上では初めてといえる出来事でした。

元号の起源

元号が日本で初めて使われたのは、西暦645年からの「大化」であるとされています。もともと一般の庶民にとっては、長い間、元号が身近なものになることはなく、その後、元号そのものが定められていない時期や、時の勢



力者によって2種の元号が並立して使われていた時代などを経て、江戸時代に入り、幕府が元号決定や新元号施行の権限を有するようになる、ようやく庶民の間にも元号の存在や使用が広まるようになったと考えられます。ただし江戸時代以前は、天皇の交代時以外でも、特に国にとって喜ばしい事があった時、また大災害が起こった時などに改元が行われることもあって、現在のように、テレビやインターネットで瞬時に情報が伝わることもない状況下では、改元があったことを知らなかったり、わざわざ変わるかもしれない元号は使わなかったり、という人が多かったのも事実のようです。

市に残る元号の記録

旧今津町役場に残されていた江戸時代末期の今津村役所の公文書の中には、明治改元の年である慶応4年（1868年）3月から書き始められた記録があります。実

際には、この年の9月8日（新暦で10月23日）に、天皇から「慶応4年を改めて明治元年とする」という「改元の詔」が発せられているはずですが、この今津村役所の記録には、表紙に「慶応四戊辰年、明治元年改元」と書かれる以外、特に改元に関わる記載はありません。また、中に記された文書では元号を使ったり、使わなかったりで、少なくとも「慶応四年六月」の表記は見られますが、その後はしばらく「辰七月」「辰八月」と干支での表記が続く、初めて「明治」の元号が見られるのは「明治元年十二月十日」の文書になります。

この記録のみでは、一般の人たちが、いつどのように改元を伝えられ、「明治」の元号を使い出したのか定かではありませんが、今回の新元号の発表とは随分ようすの違うことがうかがわれます。

図文化財課
☎（25） 8559

大満祭400周年記念事業開催

大満開藩400年にあたる本年の大満祭では、以下の記念行事の開催が予定されています。ご期待ください。

▼特設広場（お城パレーンの設置）の開設

日 時 | 5月3日 18時30分～22時

4日 9時～16時

場 所 | 勝野二区宮駐車場（大満陣屋総門隣）

▼五車別れ会場での鏡開き・餅まき

日 時 | 5月4日出 15時30分～16時

場 所 | 市宮勝野観光駐車場（宝地区）

▼400周年記念グッズの販売



編集感

「平成」が幕を閉じ、5月1日から新しい時代、「令和」が始まります。私も新元号発表と同時に高島市職員の一員となり、新しい生活が始まりました。

4月頭には職員としての心構えや救急救命講習などの研修を受け、海津大崎のさくら並木の一方通行規制にもスタッフとして参加してきました。正直、慣れない毎日に不安や戸惑いを感じていますが、魅力たっぷりの高島市で働ける喜びを胸に、目の前のことに丁寧に向き合い、この経験を今後活かしていきたいです！（YH）



広報たかしま

令和元年

5

月号

No.232

発行▼高島市

編集▼政策部企画広報課

〒490-0101 高島市新旭町北畑

〒490-0101 高島市新旭町北畑

☎ 0740(25) 8000(代)
http://www.city.takashima.lg.jp
mailto:info@city.takashima.lg.jp

市指定文化財の修理（絵画）

「釈迦十六善神像」



しゃかじゅうろくぜんじんぞう
釈迦十六善神像

釈迦十六善神像

釈迦十六善神像とは、大般若経が中国に伝来した由来を描いたものです。一般的には釈迦を中心に、その周囲に大般若経を守護する四天王と十二神将を合わせた十六善神が配置されています。また、大般若経を伝えたとして、『西遊記』で有名な玄奘三蔵が描かれることもあります。釈迦十六善神像は中国唐の時代に成立し、日本では鎌倉時代以降に流布していき、無病息災などを願う大般若会の際に本

尊として掛けられました。その釈迦十六善神像が朽木古川の大通院でも大切に残され、市の文化財に指定されています。

大通院の釈迦十六善神像は高島市へ寄託され、現在は公益財団法人住友財団の助成を受けて、大津市の文化財修理専門業者が修理を行っています。修理は平成30年から3か年で行われており、ここではその文化財修理の途中経過をご紹介します。

修理のようす

大通院の釈迦十六善神像は鎌倉時代の制作と考えられ、経年による折損、亀裂、絵具の剥離、接合材の劣化が見られていました。このままでは絵画の価値が損なわれることから専門的な修理が行われることになりました。昨年度は、本格修理の下準備としての損傷状況の確認・表装の解体・汚れの除去・絵具の剥落止め等を行いました。

写真①は、汚れを除去するようすで、濾過水を噴霧し、溶け出した汚れを下に敷いた吸水紙に吸着させています。写真②は、絵具の剥落止めのようすで、絵具の状態を顕微鏡や触診などで調べた



写真① 汚れの除去

後、接合の弱い箇所（膠（接着剤）を塗布して絵具の接着を高めます。紹介したのは一部の工程で、その他の工程



写真② 絵具の剥落止め

網を欠損部分に補填し、色を足して補彩を施していくなどの修理に入っていきます。

においても損傷状況等を調べ、適切な補修材・修理方法を検討し、慎重に修理を進めています。今後は、本紙の材料である

文化財課

（25） 8559

編集感

表紙で紹介した絶叫ブランコを私も体験してきました！ 青い琵琶湖に緑の田んぼ、さらにはメタセコイア並木まで一望できる最高の景色に気持ちが弾み、ブランコを漕ぐ足が止まりませんでした！ 他にも市内には、新たな観光スポットやカフェなど、市外から注目される場所が増えてきています。

この夏は手軽にサクッと市内を巡ってみてはいかがでしょうか。観光気分ですら、今まで気づかなかった高島の魅力を再発見でき、少し幸せな気持ちになれます♪おススメです♪ (YH)



広報たかしま

令和元年

8

月号
No.235

発行▼高島市 編集▼政策部企画広報課
〒520-1592 滋賀県高島市新旭町北畑5の5番地

☎0740(25)8000代
http://www.city.takashima.lg.jp
✉t-info@city.takashima.lg.jp

高島市ゆかりの文人たち

俳諧の広まり

日本文化の中心であった京都に隣接する近江では、文化を志向する人が多く、優れた文人が多く誕生しています。『奥の細道』など、多くの紀行文を著した俳人・松尾芭蕉は、近江の風光と人々をこよなく愛し、たびたび近江を訪れていたことが分かっていきます。そのため、県内には数多くの門人がいたほか、芭蕉の句碑も各地に建立されており、市内でも白鬚神社境内や今津町浜分區にあります。



芭蕉の句碑
(今津町浜分)

一方、市内では、芭蕉が貞享2年（1675）に近江を訪れる前からすでに俳諧が多く詠まれていました。明暦2年（1656）、近江出身の俳人である北村季吟の師、松永貞徳の高弟の安原貞室が俳書『玉海集』を発刊しました。ここには、近江の俳人の句が数多く集録されており、その中には今津町の石崎可隆と中井長次の句がみられることから、市内には早くから俳諧を嗜む習慣が広まっていたのではないかと考えられます。

歌人「渡忠秋」

渡忠秋は、文化8年（1811）安曇川町南船木で長男として生まれ、幼いころから歌道を志し、二十代で京都に移り住むと、家督を弟に譲り、桂園派の祖香川景樹の門に入って歌道を学びました。その後、明治6年（1873）には、宮内省御歌所の寄人に就任し、御歌や歌御会関係の事務を担当しました。あるがままの純粋感情を重んじる桂園派には多くの門人

が集まり、当時の歌壇の一大勢力となっていました。忠秋は、この桂園派を継ぐ代表的歌人として、景樹の高弟と称され、『桂園集』や『読史有感集』『先人抄』などの歌集を刊行しています。安曇川町南船木の西光寺の境内には、明治45年（1912）、桂園会（忠秋を追慕する人々の会）と旧高島郡教育会が共同して建立した歌碑があります。ここで、忠秋が故郷の高島を詠んだ歌を二つご紹介します。



問文化財課
(25) 800506

松ノ木内湖

渡忠秋の句碑
(西光寺境内)



編集 雑感

新年あけましておめでとうございます。本年もどうぞよろしくお願いいたします。

さて、今年の夏にはいよいよ東京2020オリンピック・パラリンピックが開催されます。市内でもメタセコイア並木道で聖火リレーが行われ、今後益々盛り上がってくること間違いなしです！これは「高島市」の魅力を全国に発信する絶好のチャンスであり、私たち広報担当の腕の見せどころです！

その日に向けて早速準備に取り掛かります！！(YO)



広報たかしま

令和2年

1

月号
No.240

発行▼高島市

編集▼政策部企画広報課

〒520-1592 滋賀県高島市新旭町北畑5の5番地

☎ 0740(25) 80004代
http://www.city.takashima.lg.jp
✉ t-info@city.takashima.lg.jp

